



Noguchi Times

Vol.
30
2023.4



西山先生(左から2人目)／トマス・ジェファーソン大学病院血管脳神経外科チームのメンバーと共に

CONTENTS

Philosophy ー私たちの想いー	01
内閣府を通じてアフリカの医療にも貢献	02
日本の食を考える	03
女子栄養大学 獲得金授与式	05
医師の卒後教育を実践 ー野口グランドラウンドー	06
医学留学への第一歩となるセミナー・選考会	07
2022年クリニカルクラークシップ	08
研修生にインタビュー	09
エクスターーンシップ レポート	10
Dr. Jerris R. Hedges 退職記念パーティー	11
野口の社員研修制度	12
40周年記念特集 Vol.2 皆さまへの感謝を込めて	13

Philosophy

私たちの想い

患者様優先の医療を目指して

Campassion

- Humanity & Empathy in Medicine -

米国財団法人野口医学研究所について

医師や医学生を始めとした医療従事者を対象に、米国での臨床留学プログラムを提供しています。

これまでに多数の医師・医学生の研修を支援し、患者様の痛みや苦しみに共感し

「私たちに治させて下さい」という精神で寄り添うことができる医療人の育成をしています。

04 野口英世博士の名言

人は能力だけではこの世に立つことはできない。
例え立身しても、機械と同様だ。
人は能力と共に、徳を持つことが必要である。

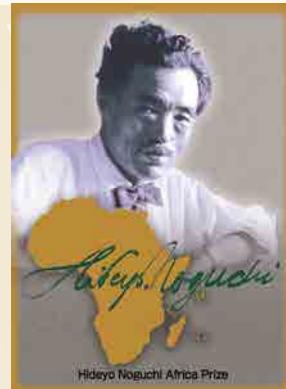


内閣府を通じて アフリカの医療にも貢献

野口医学研究所は、2022年11月、内閣府が主催する「野口英世アフリカ賞」に500万円の寄付を行いました。今春の寄付金と合わせ、総額で1,000万円の支援を予定しています。

「野口英世アフリカ賞」とは

野口英世博士の志を引き継ぎ、アフリカのための医学・医療において顕著な功績を挙げた方々を顕彰し、アフリカに住む人々、ひいては人類全体の保健と福祉の向上を図ることを目的として、日本政府が2006年に創設したものです。受賞者・団体の選考は野口英世アフリカ賞委員会が行い、内閣総理大臣が最終決定します。受賞者は表彰状、賞牌と共に賞金1億円が授与されます。



第4回野口英世アフリカ賞 受賞者

■ 医学研究分野



サリム・S・
アブドゥル・カリム博士
(南アフリカ共和国)

写真提供:Matthew Henning



カライシャ・
アブドゥル・カリム博士
(南アフリカ共和国)

写真提供:Rajesh Jantilal

■ 医療活動分野



ギニア虫症撲滅プログラム
(Guinea Worm Eradication Program)

写真提供:カーターセンター / J. Hahn

カーターセンターの主導の下、アフリカの保健省、地域コミュニティ、非政府組織(NGO)、及び世界保健機関(WHO)や米国疾病予防管理センター(CDC)等の主要パートナーとの協力により、ギニア虫症をほぼ撲滅させたその功績により授与されました。

寄付に至るまで

きっかけは野口アラムナイ*のメンバーによって言及された、アフリカにおける医療の現状でした。アフリカでは多くの組織・団体によって医療支援活動が行われているものの、根底にある医療体制の不備や医療の質は常に深刻な課題となっています。野口医学研究所はアフリカの医療に貢献するには根底となる“医療の質”的向上を図ることが重要だと考えました。「野口英世アフリカ賞」は、野口英世博士の肖像を「顔」とする当財団との親和性が高いだけでなく、アフリカ全体の未来の医療に貢献するという目的にも強く賛同できる賞であること、更には、新型コロナウイルス感染症の蔓延により感染症対策の重要性を再認識することとなり、この度の寄付に至りました。

*野口医学研究所からの支援を受けて留学した医師や医学生が、留学後も情報交換などのネットワークを構築するためにつくられた同窓会の組織。フェロー講演会や交流会、勉強会などの活動を行っている。

全国学校給食甲子園®

日本の食 を考える

野口医学研究所は予防医学の概念を大切にし、“医療を受けずにすむ健康な体”を作るために重要な「食」に焦点を当てた活動や団体のバックアップも行っています。学校給食甲子園®はその活動の一つです。



■第17回全国学校給食甲子園®

学校給食甲子園®は、「地産地消を活かした我が校の自慢料理」をテーマに、全国の栄養教諭・学校栄養職員・調理員が学校給食で提供している献立と腕を競う大会です。本大会を通じて食育の重要性を啓発しながら地産地消を奨励することを目的とし、毎年開催されています。2022年12月11日、女子栄養大学駒込キャンパスに於いて第17回学校給食甲子園®の決勝大会が行われました。今年は長引くコロナ禍や食材費の高騰等で苦難が続く状況の中、全国1,249校から応募が集まり、4次におよぶ審査を勝ち抜いた7校(各校、学校栄養士と調理員の2名で構成される)が決勝大会となる「調理コンテスト」に出席。新型コロナウイルス拡大の影響により3年ぶりとなった調理コンテストは感染症防止規定に従って実施され、献立の独創性や調理の手順、チームワーク、仕上がり状態等々の最終審査結果を踏まえ優勝・準優勝・特別賞などが選定されたのち、東京丸の内のJPタワーホールに場所を移して表彰式が行われました。



決勝大会の模様はYouTubeでライブ配信されたほか、2023年2月21日にはNHK総合の『ニッポン知らなかった選手権 実況中!』で放送されました。

審査フロー【応募数1,249校(施設)】

第1次選定
(書類審査)
212校(施設)

第2次選定
(書類審査)
55校(施設)

第3次選定
(書類審査)
24校(施設)

第4次選定
(書類審査)
7校(施設)

決勝大会
(調理コンテスト)

越生町立越生小学校が 野口医学研究所賞(準優勝)を受賞!

■ 野口医学研究所賞

最終審査では、株式会社野口医学研究所 生産管理部 部長の関川幸枝(管理栄養士)が審査員として選考に参加し、1,249校の応募の中から、関東ブロックの埼玉県越生町立越生小学校を「準優勝:野口医学研究所賞」に選出。表彰式では創立者の浅野嘉久より、受賞者の栄誉を称え賞状を授与しました。当社は「ここに寄り添う[美と健康]を提供し、人々を笑顔にする」を企業理念として掲げています。本大会が子どもたちの健やかな成長と笑顔のある毎日につながることを願います。



(左から)浅野嘉久、受賞者・栄養教諭の小林洋介さん、調理員の三好景一さん、関川幸枝

■ 受賞者からの手紙

米国財団法人野口医学研究所 創立者・名誉理事
浅野嘉久 様

この度は、第17回全国学校給食甲子園において栄えある「野口医学研究所賞」をいただき誠にありがとうございました。

今回は、地場産物をうまく取り入れ郷土愛を深め、そして郷土の偉人たちのように、ふるさとに貢献できるような人になってもらいたいと考えた献立でした。その思いが、多くの人に伝わるといいなと思っていたところ、表彰式で、浅野先生に献立にイメージした渋沢栄一翁の話を聞いていただきました。また、この献立を給食甲子園で披露するにあたり、渋沢史料館や深谷市からも協力を得ていたため、浅野先生から渋沢栄一の話をしていただきとても感謝しております。

日本の学校給食をさらに、世界に誇れるものにするには、栄養のバランスや地場産物の活用だけでなく、献立を考えた栄養教諭の想いや願いを子供たちにさらに伝える献立にし、体だけでなく心で給食を食べてもらえるものにしていかなければならないと考えています。

野口医学研究所の企業理念「ここに寄り添う[美と健康]」を提供し、人々を笑顔にする私の心の中でも大切にし、「ここに寄り添う給食を提供し、子供たちを笑顔にする」所存です。

今後ともご支援・ご協力の程よろしくお願ひ致します。

埼玉県越生町立越生小学校 栄養教諭 小林洋介
(お礼状より一部抜粋)



献立

鈴木さん家のさつま黄金飯／牛乳／平九郎のかあぶり春巻／元気百梅サラダ／武州カレー煮ぼうとう／大附みかん

エネルギー : 687kcal	マグネシウム : 115mg	ビタミンB₂ : 0.58mg
たんぱく質 : 28.3g	鉄 : 3.0mg	ビタミンC : 39mg
脂 質 : 22.4g	亜 鉛 : 3.5mg	食物繊維 : 5.1g
脂 質 : 29%	ビタミンA : 267μgRAE	食塩相当量 : 1.9g
カルシウム : 367mg	ビタミンB₁ : 0.54mg	

献立のポイント

栄養教諭：小林洋介さん／調理員：三好景一さん

主菜の「平九郎のかあぶり春巻」は、渋沢平九郎が官軍に敗れたのち、顔振(かあぶり)峠を粘り強く走り抜ける姿をイメージした一品。具材に越生産のゆずこしょうや秩父名物の「しゃくしな漬け」などを使った納豆春巻です。汁物は、渋沢栄一が愛した郷土料理「煮ぼうとう」としました。主食には、日本通貨発祥の地である秩父の郷土料理「黄金飯」をアレンジ。地元農家で2年生の児童が収穫したさつまいもを炊き込んだ「鈴木さん家のさつま黄金飯」です。「元気百梅サラダ」は、越生町の特産である梅で甘酸っぱい特製ドレッシングを作り、野菜にあえました。デザートの「大附みかん」は、隣接するときがわ町のみかん農家が栽培した無農薬みかんです。





女子栄養大学大学院
女子栄養大学



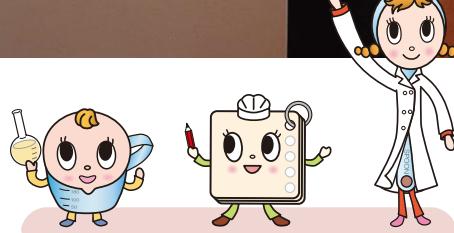
女子栄養大学 奨学金授与式

米国財団法人野口医学研究所は、2022年11月29日(火)に女子栄養大学・駒込キャンパスに於いて「第10回野口医学研究所奨学金」を16名の学生に給付しました。この奨学金は、女子栄養大学並びに女子栄養短期大学部、香川調理製菓専門学校に在籍する学生のうち、経済的理由により修学が困難な学生に対し、支援の手を差し伸べることを目的とした給付型基金です。昨年に続き、今年度も新型コロナウイルスの影響が学生の経済状況を悪化させたようです。当基金が少しでも役立つことを心から願っています。

野口医学研究所は栄養士や管理栄養士等、食に関するプロを目指す学生が一人でも多く夢や希望を叶えられるよう、今後も応援してまいります。

授与者からのお礼状より(抜粋)

両親の経済的負担を軽減するためにアルバイトを行っていましたが、今後は卒業研究や就職活動、国家試験対策などの学業に一層励みたいと考えています。今回奨学金をいただいたことでアルバイトの時間を学業に充てることができるので、本当に感謝しています。



浅野嘉久による挨拶



受賞者16名(上段2列)、香川明夫 香川栄養学園理事長(中央右)、
浅野嘉久(中央左)



医師の卒後教育を実践 —野口グランドラウンド—



卒後1年からの
指導医
対象

野口グランドラウンド

“生涯教育”という概念を基に、卒後1年～指導医までの全ての意思を対象としたオンラインセミナーのことです。「学び」は学生だけのものではなく、日々変化する時代に取り残されないように、生涯を通して行う必要があります。当セミナーでは、月に一度、現役の医師が情報のアップデートやスキルアップを図れるよう、旬の話題をテーマに、現場で実践できる内容についてお話ししています。

第14回 「認知症の人の生活を支える 予防と共生」

2022.7.13(水)



講師:石井伸弥先生
広島大学大学院
医系科学研究科
共生社会医学講座

超高齢社会における日本国内で有病率が非常に高い認知症。遅かれ早かれ誰しも認知症になることを踏まえ、認知症になった時にいかに備えるかについて考えることが大切です。基礎知識からおさらいし、社会的取り組みや制度についての解説と、認知症の現状、及びこれからについてマクロとミクロの視点で読み解き、新薬の最新情報についても詳しく教えていただきました。

第15回 「右心不全の臨床ピットフォール」

2022.8.10(水)



講師:森田泰央先生
トマス・ジェファーソン大学
准教授
心臓麻酔指導医

森田先生は、普段から病院でCABG、AVR、MVRなどの開心術に加えTAVR、TEVAR、MitraClipなどの心臓手術を担当されています。ご講演では周術期の右心不全の特徴や、右心不全の評価、治療方法、今後の研究などを詳しくお話しいただきました。実践につながるとても学びの多い講義でした。

第16回 「初期・後期研修医向けレクチャーを聞いても実践の場で活用できず焦っているあなたへ。 現場で使える型を定着させよう！」

2022.9.14(水)



講師:北野夕佳先生
聖マリアンナ医科大学
横浜市西部病院
救急医学 准教授

人は皆数多くの学びを経験しています。しかし、果たしてその学びを実践に活かせているでしょうか。北野先生には「講義を受けた」だけで満足せず、「学びを”型”にして定着させる」ためのノウハウを、様々な症例を交えて教えて頂きました。平凡に堅実にー。医師に限らず、初心に帰って基礎知識をすぐに引き出せるようにしておけば応用が利くということが感じられるお話をしました。

第17回 「電解質診療 最近の話題」

2022.10.12(水)



講師:今井直彦先生
聖マリアンナ医科大学
横浜市西部病院
腎臓・高血圧内科部長

電解質診療の中でも特にナトリウムとカリウムに焦点を当てて腎臓内科の視点から解りやすくご講演いただきました。これまでの常識を覆す最近の研究発表についても触れ、ガイドラインの変化やその背景、今後の可能性などもご紹介くださいました。今日の常識は明日の非常識。これはマネジメントの父と言われたピータードラッカーの言葉ですが、医療においても同じことが言えるのだと気付かされます。まさに目から鱗の情報もあり、時代の変化に対応し、情報をアップデートし続けることの重要性も学ぶことのできる内容でした。

第18回 「肝炎まとめて総復習 ～ウイルス・アルコール・NAFLD～」

2022.11.9(水)



講師:
山田徹先生
東京医科歯科大学
総合診療医学 総合診療科

多種に分類される肝炎に関して、一つ一つ丁寧に解説していただきました。それぞれの感染経路や原因、経過、治療中のチェックポイントなど、膨大な情報をコンパクトに解りやすくまとめていただき、参加者からは「肝疾患に対して大変理解が深まった」「1時間で全てがスッキリ出来る素晴らしい講演だった」と大変好評の回となりました。

第19回 「整理して理解する COVID-19治療」

2022.12.14(水)



講師:
吉田英樹先生
聖マリアンナ医科大学
横浜市西部病院 救急医学 助教

発生から3年目を迎えた新型コロナウイルス感染症(COVID-19)ですが、その治療法は未だ確率されていません。吉田先生が現場で診療に従事した際に見えてきたCOVID-19治療の全体像をシンプルにまとめ、治療を考えていく上で重要となる3つのステップ(①病態生理、②重症度・疾患フェーズ、③現時点でのエビデンス)について解説してくださいました。膨大な情報がたった1時間に凝縮された丸わかりセミナーとなりました。

第20回 「エビデンスに基づく成人の 予防医療 2023年度版」

2023.1.11(水)



講師:
八重樫牧人先生
千葉西総合病院 内科 部長

日米両国で多数の現場経験を持つ八重樫先生は、日本に不足しているのは「科学的根拠に基づく予防医療」だとして情報発信や啓発活動を行っています。アメリカに比べて日本の医療にいかに抜けや漏れ、無駄が多いかを指摘。その事実に気付き、視野を広げて世界標準の予防医療を目指すことが必要であると話されました。今回ががん検診と予防接種に焦点を当てたお話で、医療を受ける側の人にも大変役立つ内容でした。

YouTubeにてアーカイブ配信しています！

オンライン開催

医学留学への 第一歩となるセミナー・選考会



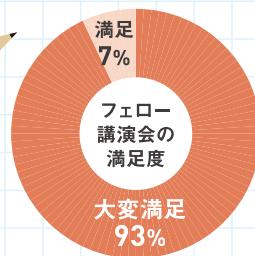
2022年12月3・4日、臨床留学や米国医療に興味を持つ方々を対象とした

オンラインセミナー並びに米国臨床留学生選考会を実施しましたので、その様子を報告します。

第5回野口フェロー講演会

満足度100%を叩き出した 2022年のフェロー講演会！

『米国臨床留学の体験を語る。そして今一』と題し、
驚異の満足度を達成したフェロー講演会の全貌を紹介します。



第1部

キャリア形成の過程としての 海外臨床留学



講師：星寿和先生
アイオワ大学外科 臨床教授

視聴者参加型のコンテンツを用意することで、一方的になりがちなオンラインセミナーをインラクティブに展開。現在に至るまでには糾余曲折・多事多難があり、常に自分の弱みを改善し続ける努力を繰り返してきたと振り返りました。また、海外臨床留学のメリットはもちろん、デメリットにも触れて自身のケースを紹介し、ゴールを明確にしてその実現に向けて突き進むことが大事であると強調しました。

フェロー講演会 の反響



あたたかく和やかな雰囲気の講演会で、米国臨床留学の多くの情報を得ることができ、先生方の留学に至るきっかけや考え方、具体的な準備の方法やアドバイス等、今後自分の留学準備に必要な心構えができました。

第2部

米国で培ってきた臨床経験を 日本の医療へ還元できるやりがい



講師：牧野淳先生
都立墨東病院 集中治療科 部長

セミナーで一般的に語られる「成功体験記」ではなく、敢えて「失敗体験記」を中心に講演された牧野先生。自らが経験した多くの挫折と失敗談を赤裸々に告白し、何があっても決して諦めないことが成功の秘訣なのだと語りかけました。淡々と語る苦労話の中には数々の努力が垣間見られ、先生のお話は正に説得力の塊とも言える内容でした。

臨床留学の方法はネットにたくさん書かれている中で、USMLE取得だけではなく、仕事、家族、その先臨床留学後どのようにキャリアを形成するか、日本での医療にどのように貢献するかまで具体的に話を聞くことができ、とてもよい経験になりました。

選考会

昨年に続きオンラインでの実施となった選考会。研修に送り出す医師や医学生を選定する野口医学研究所の選考会ですが、その目的は単に合否を決めるではありません。日米の医療現場を熟知する選考委員や野口医学研究所役員からは、今後受験者全員がスキルアップできるよう、良かつた点や改善すべき点などについて、一人一人に対し丁寧なフィードバックが行われました。



受験者の コメント

01

今回のように面接や書類に関して直接評価コメントを頂ける機会はないので、大変勉強になりました。フィードバックをもとに今後さらに精進してまいります。

02

先生方からの講評、コメントは大変参考になりました。反省点はしっかり振り返り、次に進みたいと思います。

03

未熟な点が多く浮き彫りになった選考会でしたが、反省を活かし、充実した留学となるよう精進します。

2022年
9月

2022年クリニカルクラークシップ

3年ぶりに現地での 学生向け研修が再開！

研修者：医学部5年生4名 研修施設：トマス・ジェファーソン大学

研修のスケジュール



コロナ禍後、初の現地での
留学プログラムでした！

9/22(木)：学生寮にチェックイン

23(金)：オリエンテーション

Campus Tour

24(土)：フリー



shopping eat

25(日)：フリー



26(月)：

T
研
修
上

Internal Medicine
(Morning Report, Team Rounds)

Outpatient
Gastroenterology

JeffHOPE見学

27(火)：



Internal Medicine
(Morning Report, Team Rounds, Noon Conference)

Emergency
Medicine

JeffHOPE見学

28(水)：

Emergency Medicine
(Resident Conference)

Outpatient
Family Medicine

JeffHOPE見学

29(木)：

Outpatient
Pediatrics

Lecture

JeffHOPE見学

30(金)：

修了式

Chinatown Clinic

Closing Ceremony

満足度 **100%!!**

わずか5日間で右の様な声がありました！

►クリニカルクラークシップは役立ちましたか？

4人中4人が YES!

►英語のスキルが向上したと思いますか？

4人中4人が YES!

►他の人にこの研修を勧めたいと思いますか？

4人中4人が YES!

研修の感想

群馬大学5年 富樫華子

研修を通して様々な社会的背景の患者さんに合わせた対応や社会に合わせた病院の設備が整っている様子を学ぶことが出来ました。外来の方式が日本とは異なっている点やミーティングの部屋が決まっていない点など効率の良さを感じた部分が多くありました。一方で日本の国民皆保険により、患者さんが平等に医療を求めることが出来る良さを改めて感じる事も出来ました。米国の学生の行える医療行為やプレゼンテーション能力からより普段の実習に積極的に取り組んでいきたいと思いました。元々米国での臨床に興味がありましたが、実際の米国での医療を見て自分の学びたい事や将来のキャリアプランを明確にする必要があると感じました。今回の研修で経験出来たことを生かして今後の医師としての人生を歩んでいきたいと思います。



現地で突撃! 研修生に インタビュー

エクスターインシップで渡米中の研修生に、野口医学研究所のスタッフが現地で突撃インタビューを行いました。研修レポートとは異なる視点での生の声を紹介します。



合志病院
脳神経外科レジデント

西山遼先生

研修期間:2022年11月28日~12月16日
研修科:脳神経外科
研修施設:トマス・ジェファーソン病院 神経科

Q1. 現場で印象的だったことは何ですか?



11個の手術室が毎日稼働していました。日本でも現在専攻医として執刀、助手をしている手術でも日米での小さな手技の違いを感じたり、日本では見たことのない装置や方法を目の当たりにしました。また手術を執刀するのは主にチーフレジデントが一人で、ジュニアレジデントが手伝ったり、アテンディングが監督に来たりすることはあっても大部分を一人で執刀しているのは日本とは違い印象的でした。アメリカではレジデントが終了するまでに日本と比較して非常に多くの症例を経験することができ、一人前の執刀医として独立できる技術を身につけており、専門医になってからもまだこれから執刀をやっと任されるようになる日本とは大きく異なっていました。

Q2. アメリカの医療現場を経験して気づいた 日米間での違いはありますか?

日本では専攻医と指導医がチームになって手術を行い、病棟での業務もある程度分担して行うことが多く、また患者家族への説明も指導医がメインに話をします。一方アメリカではレジデント一年目は基本的に手術に参加することではなく、病棟業務を主に担当します。朝の回診でチーフレジデントに方針を相談してその日一日で業務をおこなっていました。しっかりと一年かけて病棟での全身管理を行うので、病態把握に長けていました。また手術について、アメリカではチーフレジデントが主に一人で行い、アテンディングは進行状況を確認に来てまた別の部屋に行くことが多いと感じました。多くの部屋で手術をおこなっており、アテンディングは全体を統括しているようでした。日本ではチーム全体で行い、指導医がメインで執刀していることが多く、ここも日米での違いがあると感じました。

Q3. アメリカの文化や環境について 感じたことはありますか?

幅広く世界各国からアメリカに来ていてさまざまな国との文化に触れることができました。皆でディスカッションをし、学年を問わず気軽に相談しやすくとてもいい環境だと思いました。プロトコルや論文をまとめる姿勢は日本よりも強いように感じ、既存の枠にとらわれない姿勢も見ることができました。一方で手術では件数が多く、時間も早く終わっていましたが、日本よりも大雑把にやっている部分も見られました。



Q4. 研修以外でアメリカに行って楽しかったことは 何ですか?

病院内ではどのスタッフからも暖かく迎え入れてもらいました。食事に誘ってもらい、ワールドカップと一緒に観戦しました。フィラデルフィアはアメリカ建国の地で歴史もあり、自由の鐘や独立記念館を訪れ、アメリカの歴史に触れました。美術館や博物館、動物園などにも行きました。アメリカ東海岸は都市部が多く、週末にはワシントンDC、ニューヨークを訪れました。またクリスマスシーズンであちこちで大きなクリスマスツリーがあり、どれも綺麗でした。フィラデルフィアで有名なチーズステーキサンドイッチやアメリカといえばのステーキは美味しかったです。寮は狭めの部屋でしたが、暖房が常にについていて氷点下になることもある12月でも快適でした。



エクスターントレーニング レポート

Kuakini Medical Centerでの研修

手稲渓仁会病院 総合内科

増田海平先生

研修期間:2022年12月10日~12月30日

研修科:内科・家庭医療科

研修施設:クアキニ医療センター

はじめに

2022年12月12日から30日までUniversity of Hawaii関連病院の一つであるKuakini Medical Center(Internal Medicine, Family Medicine)で研修させていただきました。2020年12月に野口医学研究所のエクスターントレーニングの選考会に参加させていただいたおりましたがコロナ禍の影響もあり、2年の月日を経てようやく研修に参加することができました。



内科のチームでお世話になったInternのMalu、UpperのJoshと(写真左:増田先生)

Internal Medicineでの研修

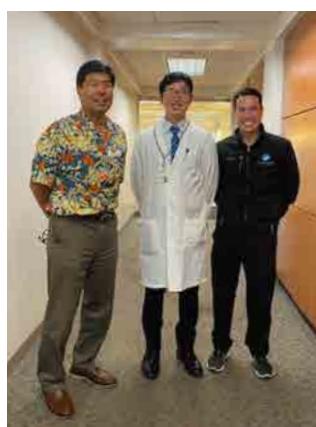
Internal MedicineではUpper resident(PGY2-3)とIntern, Medical Student(12月はVacation のため不在でした)で構成される4つのチームのうち1チームの一員として参加させていただきました。各チームの患者数は平均するとICU/CCUは1-2人、一般病棟は6-8人程度でした。疾患に関しては、肺炎・膿胸や腎盂腎炎、電解質異常などcommon diseasesからアルコール離脱・急性肝不全・敗血症性ショックといった重症疾患まで多岐にわたりました。診療や教育は屋根瓦方式をとっており、基本的にはまず朝にInternがNight floatからの引継ぎ、Medical Recordのチェック(Overnight eventやバイタルサイン、検査結果の確認)、pre-roundを行い、自分でまずはその日の方針を考えます。私は毎日朝5時過ぎにInternの先生と待ち合わせをして一緒に行動し、早朝からInternの先生とお互い意見交換をしたり、手分けして文献を調べたりしました。また、Pre-roundでは、日本語しか喋らない患者さんも入院していたので通訳させていただくこともありました。6時半ごろにUpperと合流し、検査や治療方針の共有と確認を行います。その後、朝のDidactic終了後にAttendingの前で、再度presentationをし、方針の確認と決定を行っておりました。私も受け持ち患者さんを2人程度割り当ててもらい、指導医の前でBed-side presentationをさせていただきました。米国のResidentの生活は朝早いと事前に伺っていましたが全くその通りで、これらの業務以外にも、Disposition調整、Discharge Summaryの作成、家族との連絡、ICU Roundなど忙しなく時間が過ぎていきました。また、Kuakini Medical CenterでのRotationは4日に1日に入院担当チームの番が回ってきて、1日に4-6人の患者が入院してきました。入院を担当する日は、複数の新規入院の対応、それにともなうAdmission Summaryの作成などの業務が一度に降りかかるため、大変忙しそうでした。日本の初期研修(施設によってばらつきはあるかも知れませんが)と比べて、米国ではInternが即戦力とみなされており、トレーニングは全体的にintenseであると感じました。さらに、米国では常に効率が求められるため、さらにpressureが大きくなっていると感じました。

Family Medicineでの研修

Family Medicineでは長年、Hawaiiで臨床に従事されている渡慶次仁一先生の外来診療を見学させていただきました。外来診療では高血圧や糖尿病などの慢性疾患のみならず、脂漏性角化症の切除など多岐にわたりました。また、MaunalaniにあるNursing Facilityの回診にも同行させていただきました。渡慶次先生は医学知識のみならず日本の歴史や医学史など半端でない知識をお持ちで、また、COVID-19の最新のトピックをはじめ最新の医学知識を日々updateし続けるその姿勢に非常に圧倒されました。日本人の患者さんも多く、信頼も非常に厚かったです。渡慶次先生からは医学知識のみならず、患者さんに接するときの姿勢や医師としてもつべき信念など多くのことを学ばせていただきました。特に、印象に残ったことは、“今後米国で働くのであれば、日本から来た医師はエリートでかつ、Ambassadorのような存在とみなされるので、より一層、日本に関する知識を身に付ける”ようにアドバイス頂いたことです。渡慶次先生から学んだことを活かし、初心に戻り明日からの臨床に生かしていこうと思います。

まとめ

私は将来、米国でのInternal Medicine, Infectious Diseasesのトレーニングを目指しており、今回の研修に参加し、現場の雰囲気を肌で感じる良い機会となりました。また、現在は急性期病院で研修医の指導にも携わっているので、米国の研修システムと比較し、日本の医学教育の現場を客観視できる良い機会となりました。



指導医のDr. Sumida、Chief residentのGeneと



ハワイ大学医学部長

Dr. Jerris R. Hedges 退職記念パーティー

Dr. Jerris R. Hedgesは、JABSOM(ハワイ大学医学部)創設以来最も長く医学部長を務めた人物であり、2023年3月1日に引退されました。ハワイ大学と野口医学研究所は30年以上前から提携関係を築いており、Dr. HedgesのリーダーシップによってJABSOMと野口医学研究所のパートナーシップは強固なものとなっています。2018年には、グローバルな医学交流活動を通じて日本の医学教育の発展に貢献したDr. Hedgesの栄誉を称えるため、野口医学研究所はThe Hedges/Izutsu/Asano Project in Humanity and Empathy in Medicine and Medical Educationという名の新しいコラボレーションを開始し、10年間で100万ドルを寄附することによりハワイ大学医学部での医学教育&交流活動を支援しています。

2009



2013



2018



2023年2月24日、野口医学研究所の役員を中心としたチームはハイイを訪問し、Dr. Hedgesの15年間に亘るリーダーシップを称える退職記念パーティーに出席しました。



“Dr. Hedges, it has been a privilege to work with you these past 15 years. Congratulations on your retirement and we wish you all the best in this new chapter of your life.”

Hedges先生、この15年間あなたと一緒に仕事ができてとても光栄でした。ご退職おめでとうございます。新たな人生でのご活躍を心よりお祈り申し上げます。

野口医学研究所一同

野口の社員研修制度

アメリカ2週間の ホームステイ

研修の目的

- その1 米国財団法人野口医学研究所の歴史を学ぶ
- その2 アメリカの文化を学ぶ
- その3 医学教育&交流活動の現地の様子を理解する

研修者

入社6年目
マーケティング部
田中 瑛子
(アメリカ研修2回目)



アメリカ フィラデルフィア編



米国・フィラデルフィアに本部を置く野口医学研究所では、社員の研修制度として、少なくとも1人1回の米国研修を行っています。この経験により組織の歴史や米国文化を学ぶだけでなく、米国ドラッグストアの情報や物事の発想の転換を得る機会として、日々の業務に役立てています。今回は特別研修として2週間のホームステイを経験した社員のレポートをまとめました。

今回の出張では、野口医学研究所の多くの関係先に行くことができました。
数ある訪問先から2つの施設を抜粋してご紹介します！



トマス・ジェファーソン大学(TJU)訪問



大学内の研究室

米国財団法人野口医学研究所の評議員会長佐藤隆美先生の研究室を訪問しました。

この日はシングルマザーの子供たちのシェルターを訪問しました。



JeffHOPE

JeffHOPEとは、TJUの医学生(主に1~2年生)が、経済的な理由で保険に入れない人達や、病院にかかる余裕が無い人達を対象に、診療を行うボランティア団体です。

フィラデルフィア小児病院(CHOP)訪問



病院のエントランス

内装は、子供たちが楽しい気持ちになれるように、クリスマスのデコレーションやカラフルなデザインになっていました。

CHOPはアメリカを代表する小児病院です。

野口医学研究所はCHOPに対し、Asano-Adachi Fundを通じて金銭的な支援を行っています。

その基金を用いて血液学の研究をしている高崎かおる先生に研究室を案内していただきました。



病院内の研究室

右:高崎かおる先生
左:Dr.Osheiza/Abdulmalik



感想

今回の研修を通して、改めて野口の医学交流活動の歴史を感じることができました。この2週間で、アメリカの様々な場所で活躍する多くのドクターと一緒に会う機会がありましたが、どの先生も野口と浅野への感謝の言葉を口していました。今年40周年を迎える野口は、これまでに数々の偉業を成し遂げてきたのだという事を、外部の方からお話を伺うことで改めて実感しました。渡米前はこの2週間の研修でこのように野口の歴史に触れる機会は少なく、自らの語学研修が主だと考えていましたが、外部の先生とお話しする度に野口の歴史を深く知ることができたように思います。私の所属する株式会社野口医学研究所のマーケティング部は、来年以降、知名度の拡大を目指しています。それには、野口の医学交流活動を広めることが重要であるため、その理解をより一層深められたこととても感謝しています。マーケティング部の一員として、株式会社野口医学研究所の躍進に貢献していきたいです。本来の目的である「語学研修」に関しては、自分の実力を知る良いきっかけとなり、今後もスキルアップを続けていく必要があると感じました。

40周年
記念特集
— Vol.2 —

皆さまへの 感謝を込めて

米国財団法人野口医学研究所は、おかげさまで創立40周年を迎えることとなりました。「40周年記念特集」では、前号に続き、これまでの活動の軌跡と今後の展望についてお伝えします。



軌跡

2010

2010年12月 Dr.Thomas J.Nasca 会談・講演会実施	2011年3月 東日本大震災 7月 サッカー女子 ワールドカップで 日本初優勝	2012年2月 東京ベイ・浦安市川医療センター (野口英世記念・野口国際医療センター) オープニングセレモニー 6・7月 中国福建省立病院看護師招聘	2013年10月 女子栄養大学に「野口 学研究所 奨学金」基金 (大学生対象)を設立	2014年2月 米国栄養士研修実施	2015年1月 トマス・ジェファーソン大学に The Asano Program(寄附基金)を設立 4月 女子栄養大学に「浅野嘉久賞 奖学金」 基金(大学院生対象)を設立
2010年12月 Dr.Thomas J.Nasca 会談・講演会実施	2011年3月 東日本大震災 7月 サッカー女子 ワールドカップで 日本初優勝	2012年2月 東京ベイ・浦安市川医療センター (野口英世記念・野口国際医療センター) オープニングセレモニー 6・7月 中国福建省立病院看護師招聘	2013年10月 女子栄養大学に「野口 学研究所 奨学金」基金 (大学生対象)を設立	2014年2月 米国栄養士研修実施	2015年1月 トマス・ジェファーソン大学に The Asano Program(寄附基金)を設立 4月 女子栄養大学に「浅野嘉久賞 奖学金」 基金(大学院生対象)を設立

功績の証! 米国大学医学部の教育センターに 浅野の名前が刻まれる

1991年からの永年に亘る日米間の国際医学教育&交流活動の実績が認められ、2019年11月25日、トマス・ジェファーソン大学内に、創立者 浅野嘉久の名前が刻まれた「Asano-Gonnella 医学教育センター」が設立されました。米国大学医学部の教育センターに日本人の名前が刻まれた前例ではなく、この快挙を祝した設立記念式が盛大に催されました。本センターの創設ディレクターを務めるのは、トマス・ジェファーソン大学の元医学部長であり、野口医学研究所の創立メンバーの一員でもある



Dr. Joseph S. Gonnella。“Empathy”を生涯の研究テーマとして、約50年に亘り大学の医学教育の改革に携わるとともに、野口医学研究所の活動にも設立当初から継続的に協力・支援をしてくださいました。

今後の医学界、 野口医学研究所の未来

野口医学研究所の支援によって留学した医師や医学生の同窓会組織であるアラムナイは現在1,300名に上り、多くの優秀な医師を輩出してきました。

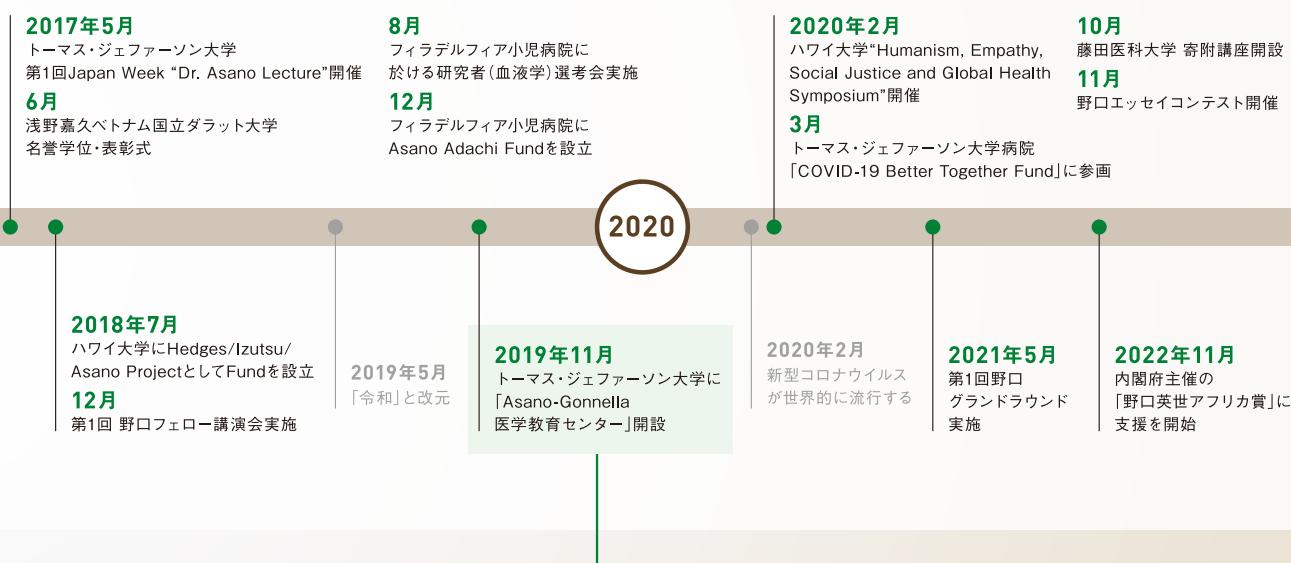
私たちの財団は、いわゆるフィロソフィーとコンセプトは「Humanity & Empathy in Medicine」。昔の医学というと、知識やノウハウ、技術をメインとしていましたが、現在は人間性や共感が医療にとって最も必要なことだと考えています。全部総括するなら「Compassion」。お互いに共感を抱けるようでなければ患者と医師、医療人の関係も成り立たなくなってしまいます。医師は患者と同じ目線に立ち、「私に治させてください」という信念でなければいけない。全ては心、ハートなんです。つまり人と人が互いに尊び合うこと。それはファミリーである従業員に対しても同じです。今後もその精神を継承していきたいと思っています。

加えて、近年は管理栄養士の地位を上げようという動きがあります。日本には世界に類を見ない保健所という設備が各地にあり、栄養士・管理栄養士が国民一人ひとりの健康と幸せの水先案内人として重要な役回りを務めるべきだと考えています。そうした栄養士のための教育、育成をさらに伸ばしてあげたいと考えています。



野口医学研究所 創立者

あさの まさる



Dr. Gonnellaが語る 浅野との関係性と医学交流活動

Dr. Asano(ヨシ)と私の関係は正にイタリア語の「Amicizia(深い友情)」という言葉がよくマッチしていると感じています。互いに信頼し、決して憤ることなく、ミスを責めたりも利用したりもしません。彼は寛大でトマス・ジェファーソン大学に対し長年に亘り多大な貢献をしてきました。これは称賛に値します。そのため私たちはセンターの名称に彼の名を刻み、功績を称えることにしたのです。彼との関わりは私にとって大きな意味を持っています。そして、野口医学研究所の医学交流活動によって“Empathy”を理解できる医療人が生み出され、国際的な影響を与えることは大変喜ばしいことだと思っています。トマス・ジェファーソン大学と野口医学研究所の関係が、日米間における良好な協力関係を示すケーススタディとなることを期待しています。

2022年12月9日

インタビュー:田中 瑛子



トマス・ジェファーソン大学 名誉医学部長 Dr. Gonnella



Noguchi Times

Vol.30

発行: 2023年4月
編集: 〒105-0001 東京都港区虎ノ門1-12-9
スズエ・アンド・スズエビル4階
TEL.03-3501-0130
米国財団法人野口医学研究所
<http://www.noguchi-net.com>